

アポプラス、専門MR100人

抗がん剤・腸疾患薬 普及に対応

来年度にも増員、養成急ぐ



医薬情報担当者(MR)の派遣事業を手がけるアポプラスステーション(東京都中央区、阿部安孝社長、03・5800・5827)は、2019年度に、がんまたは炎症性腸疾患(IBD)の専門知識を持つMRを17年度末比6倍以上の約100人に増やす。製薬企業が抗がん剤やIBD薬の開発・販売に力を注いでおり、アポプラスは専門MRを確保したい需要に対応する。一定の経験があるMRを対象に手厚い研修を施し、当該領域の医師と対話ができる人材を育てる。

18年3月時点でアポプラスは、がんの専門MRを8人、IBDを7人持つ。18年度は両領域それぞれ20人ずつ増やす方針で、19年度も同様に計画する。専門MRとして育成する人材は、糖尿病や脂質異常症など生活習慣病の経験があるMRに手厚い研修を施す(IBD専門MRの育成プログラム)。

がん領域は武田薬品工業や第一三共、エーザイなど多くの大手製薬企業が重点分野と位置付ける。IBDは消化管に原因不明の炎症をおこす慢性疾患の総称。具体的には潰瘍性大腸炎やクローン病のことを指し、大手だけでなく中堅の製薬企業でも治療薬を販売・開発する動きが活発になっている。

EAファーマ(東京都中央区)とキッセイ薬品工業は17年12月、潰瘍性大腸炎治療薬「レクタブル2ミゲ注腸フォーム14回」を発売した。あすか製薬は肝性脳症薬「リファキシミン(一般名)」について、クローン病への適応拡大に向けた第1相臨床試験を実施中。